

昔、江戸時代の末近い頃まで、東林木村と美談の堺、地名で「七反」と云う辺りは、広い低湿地帯でかなり大きい池があり、そこが船溜りになっていて、この船溜りから美談の市倉を経て、平田の灘まで運河が通じていたと言われています。

江戸時代の初め（慶安三年）湯屋谷川が山津波のため堰止められて東流した時、西流に復旧しなかったのは、船溜りや運河の水源確保のためだったと思われます。

この船溜りの北側が小高い丘になっていて、そこに熊野神社の小社が建っており、頂上に「船繋ぎの松」と呼ばれる大松が生えていたためこの山は船山と呼ばれていました。

この松の木には昔から言い伝えがあります。

古老の話では、熊野権現を崇敬し、紀州熊野に参詣した信者が、夢の中で権現に会い、鈴と手拍子を神体として屋敷東の山に埋め、この山を「舟山」と呼ぶようにとの告示があったそうです。

信者は後日、鈴と手拍子を得て、そこに松の木を一本植え、屋敷の山手に社を造って「御舟山」と称して崇敬したと言われています。

なお、舟山の熊野神社は、都我利神社に合祀されましたが、現在その地は都我利神社の社領として「船山跡地」として残っており、

氏子会が碑を建てて祀っています。

